論文審査の要旨および担当者

愛知学院大学

報告番号	㊙ 乙 第　　号	論文提出者名	宮本　佳宏
論文審査委員氏名	主査　服部　正巳 副査　福田　理 嶋﨑　義浩		
論文題名	高齢者施設における全身状態と口腔状態の関係		

インターネットの利用による公表用

（論文審査の要旨）

No. 1

愛知学院大学

要介護高齢者の全身状態と口腔状態の関係は明らかではない。

申請者は、グループホームと小規模多機能型居宅介護の施設（GH 等）、特別養護老人ホーム（特養）、そして介護療養型医療施設（療養病床）の入所者における全身状態と口腔状態を調査し、構造方程式モデリングにより、要介護高齢者の全身状態と口腔状態の関係を明らかにする事を目的としていた。

調査対象は GH 等（39 名）、特養（72 名）、療養病床（84 名）に入所中の高齢者 195 名としていた。

調査方法は意識障害の評価（Glasgow Coma Scale、以下 GCS）、口腔内湿潤度（柿木の臨床診断基準）、義歯使用の有無、口腔内状態について評価していた。また、障害高齢者の日常生活自立度、認知症高齢者の日常生活自立度、摂食・嚥下状況のレベル、口腔ケア自立度についても介護者への聞き取り調査を行っていた。統計解析は、一元配置分散分析とクラスカルウォリス検定、ならびに χ^2 検定を行い、多重比較はテューキーの HSD 法とマンホイットニー U 検定を用いてボンフェローニの補正を行っていた。さらに、構造方程式モデルを構築して検討していた。

被験者の属性は施設間で性別の割合に有意な差を認め（$p<.001$）、療養病床は男性の割合が多く、特養は女性の割合が多い集団であった。年齢は施設間に有意な差を認め（$p=.010$）、療養病床は特養（$p=.028$）と GH 等（$p=.032$）と比べ年齢が若い集団であった。残存歯数では各施設間に有意な差を認め

なかった（p=.061）。義歯使用の有無ではGH等と療養病床で義歯使用の有無の割合に有意な差を認め（p<.001）、療養病床は使用なしの者の割合が多く、GH等は使用ありの者の割合が多い集団であった。

意識障害は施設間において有意な差を認め（p=.002）、GH等は特養と療養病床と比べGCSの点数が良い集団であった。

障害高齢者の日常生活自立度はGH等と特養、特養と療養病床、GH等と療養病床の各施設において有意な差を認め（p<.001）、GH等の自立度が一番高く、特養、療養病床という順に低くなるという事が分かった。

認知症高齢者の日常生活自立度はGH等と特養において有意な差を認め（p=.002）、GH等は特養と比べ自立度の評価が良い集団である事が分かった。

摂食・嚥下状況のレベルはGH等と特養、特養と療養病床、GH等と療養病床の各施設において有意な差を認め（p<.001）、GH等の自立度が一番高く、特養、療養病床という順に低くなるという事が分かった。

口腔ケア自立度は自立群でグループホーム等と療養病床、一部介助群で特養と療養病床、全介助群でグループホーム等と療養病床に有意な差を認めた（p<.001）。

口腔内アセスメントは口腔清掃度では各施設間に有意な差を認めなかった（p=.201）。口腔乾燥度は施設間において有意な差を認め（p<.001）、療養病床はGH等（p<.001）と特養（p=.001）と比べ口腔乾燥度の評価が悪い集団である事が分かった。舌苔では各施設間に有意な差を認めなかった（p=.167）。

口臭では各施設間に有意な差を認めなかった(p=.091)。

構造方程式モデリングでは探索的にモデルを構築し、実データとモデルの適合度の検証を行い、簡潔で当てはまりが良好なモデルについて検討していた。被験者は153名であった。

全身状態は、認知機能と、身体機能に分けた。認知機能を説明する変数は、GCS、認知症高齢者の日常生活自立度、口腔ケア自立度とした。身体機能を説明する変数は、口腔ケア自立度、障害高齢者の日常生活自立度、施設、義歯使用の有無とした。また、口腔状態を説明する変数は、義歯使用の有無、摂食・嚥下状況のレベル、口腔乾燥度としていた。

今回の身体機能と認知機能を全身状態と考えた構造方程式モデリングの、GFIは.946、AGFIは.870、RMSEAは.102であった。さらに、認知機能と口腔状態に絞ったモデルは、GFI=.980、AGFI=.948、RMSEA=.033、また身体機能と口腔状態に絞ったモデルはGFI=.991、AGFI=.973、RMSEA<.001とさらに良好な適合を認めた。

本研究でGH等、特養、療養病床に入所する高齢者の全身状態と口腔状態の調査を行い、構造方程式モデリングで認知機能と身体機能と、口腔状態との関係を確認したところ、モデルとデータ間に良好な適合を認めた。すなわち、要介護高齢者の全身状態と口腔状態が関連していることが明らかとなった。この結果は、今後の歯科補綴学、高齢者歯科学、障害者歯科学、口腔衛生学ならびに関連諸学科に寄与するところが大きい。よって本論文

（論文審査の要旨）

No. 4

愛知学院大学

は博士（歯学）の学位授与に値するものと判定した。

平成２７年 1 月２８日